埼玉大学文化科学研究科修士課程学位論文・特定課題研究成果要旨

研究専攻（専門領域）	文化構造研究専攻（アメリカ研究）	学籍番号	06CS015
氏名　深松　亮太	ローマ字　FUKAMATSU RYOTA	国籍（留学生）	

修士学位論文名 特定課題研究名	ポピュリスト運動と「人種」 ―20 世紀転換期アメリカ合衆国における国民化のプロセスと「白人支配」―		
提出年月日	2008 年 1 月 10 日	指導教員	有賀夏紀
体裁（論文）	論文 91 項（1 項文字数 1200 字）	言語	日本語
別冊添付資料等			
キーワード	ポピュリスト運動　人種　米西戦争　帝国主義　国民統合		

本稿は、アメリカ合衆国における国民の境界の制定が、国内外を横断して行われつつある状況において、「人種」の違いに対する意識が強化されていった過程を、ポピュリスト運動の文脈のなかで考察した。20 世紀転換期に展開されたポピュリスト運動では、貧しい白人と黒人による経済的利害に基づいた連帯が試みられていた。このポピュリストによる人種連帯に関しては、その存在や実体をめぐって解釈の論争が繰り返されてきた。そして近年では、この人種連帯を打倒する目的で「人種」の概念が構築されていったと提起する研究が現れ始めている。しかし、それらの研究では、人種連帯の打倒を望む民主党が、白人の反黒人感情を煽る宣伝を行ったことの帰結のみに関心が向けられており、これらの宣伝に対するポピュリストたちの反応に関する検討が加えられてこなかった。また、人種連帯を打倒する目的で展開された「反黒人」の宣伝は、南部のポピュリストたちの「人種」の違いに対する意識が変化した経緯を示すことができるが、中西部のポピュリストたちの人種観の変化を示すことは、できないのである。

そこで本稿は、南部と中西部の双方のポピュリストたちの人種観が変化していく経緯を示すために、20 世紀転換期のアメリカ社会において、国民としての条件が「人種」によって規定されていく過程に注目した。具体的には、この時期のアメリカ南部では、ポピュリスト運動によって分裂した白人層を再統合するために、投票権を制限する州法改正が急速に進んでいた。そして、南部ポピュリストたちは、貧しい白人の投票する権利が奪われることに対する危機感から、「人種」の差異に対する意識を強化すると共に、階級に対する意識も強めていったのである。また、中西部のポピュリストたちは、米西戦争を通じて獲得した諸国の住民を、アメリカ人として受け入れるかをめぐる議論に積極的に参与していた。そしてこの論争では、アメリカの植民地保有に賛成する者と反対する者の双方が、「人種」の違いに基づいて自らの正当性を訴えていた。

これらの国内外を横断して行われつつあった国民の境界をめぐる問題では、「人種」の違いに基づく政治的適性をめぐる議論が行われており、アメリカの黒人と植民地の異なる人種には、政治的適性がないものとされ、国民としての権利が否定されたのである。また、他国における白人による「異人種支配」とアメリカ国内における「白人支配」は、互いに正当化しあいながら、優秀な白人が劣等人種を支配することを当然視する考え方が定着していった。つまり、ポピュリストたちは、「人種」の差異と国民の境界をめぐる問題に日常的に触れることを通じて、人種に関する自らの意識を変化させていったのである。